



[野菜部門]

[農業研究所ホームページへ](#)

6. トマトの摘花房処理による秋期増収効果

[要約]

岡山県中北部地域の夏秋雨除けトマト栽培では、7月中旬に開花した花房を摘除することで、9月以降の草勢を強く保つことができ、8月の収量は減少するが、秋期（9～10月）の収量が増加する。

[担当] 農林水産総合センター農業研究所 高冷地研究室

[連絡先] 電話0867-66-2043

[分類] 技術

[背景・ねらい]

県中北部の夏秋雨除けトマト栽培では、夏期の高温により草勢が弱まり、単価の上昇する秋期に収量低下がみられる。そこで、高温期の収穫作業の省力化及び秋期の草勢維持に有効と考えられる、夏期の摘花房処理が秋期収量に及ぼす効果を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. トマト穂木品種「桃太郎ワンダー」、台木品種「グリーンフォース」の接ぎ木株に対して、7月中旬に開花した花房（おおよそ5～7段花房）を摘除することで、処理した2、3段上位の花房直下の茎径が太くなる（図1）。
2. 7月中旬に開花した花房を摘花房処理することで、8月の収量は減少するものの、秋期（9～10月）の収量は増加し、粗収入もやや増加する（表1、表2）。

[成果の活用面・留意点]

1. 本試験は、農業研究所高冷地研究室の夏秋雨除けハウス栽培において、一本仕立て管理で、給液装置を用いた養液土耕栽培の結果である。
2. 8月の寡日照条件などにより、摘花房処理による秋期増収効果は、小さくなる場合がある。



[具体的データ]

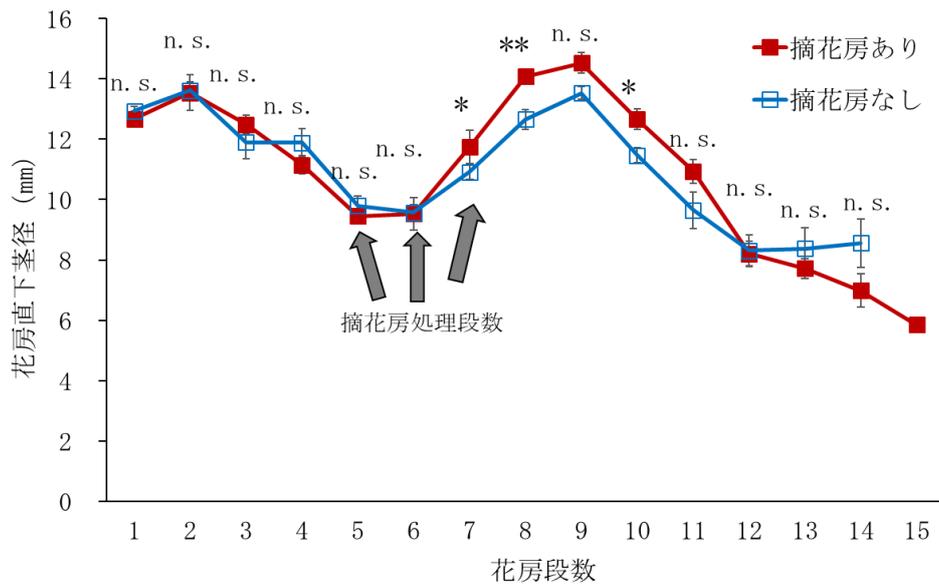


図1 摘花房処理が栽培終了後の花房直下茎径に及ぼす影響

注) **は t 検定で 1% で有意差あり、*は 5% で有意差あり、n. s. は有意差なし

表1 摘花房処理の時期が収量に及ぼす影響 (2020年)

処理区 (時期)	可販収量 ^z (kg/株)				全期間 (7~10月)	秋期 (9~10月)	粗収入 ^y (円/株) 全期間 (7~10月)
	7月	8月	9月	10月			
摘花房あり (7月上旬)	1.66	1.40	1.18	0.97	5.28 (99)	2.23 (109)	1,786 (99)
摘花房あり (7月中旬)	1.78	1.43	1.42	1.06	5.68 (107)	2.47 (121)	1,966 (109)
摘花房なし	1.69	1.57	1.06	0.97	5.29 (100)	2.03 (100)	1,792 (100)

^z 可販収量は総収量から規格外品と小果を除いたもの

^y 粗収入は各月の平均単価×可販収量の合計

表2 摘花房処理が収量に及ぼす影響 (2021年)

処理区 (時期)	可販収量 ^z (kg/株)				全期間 (7~10月)	秋期 (9~10月)	粗収入 ^y (円/株) 全期間 (7~10月)
	7月	8月	9月	10月			
摘花房あり (7月中旬)	1.14	0.57	0.72	0.94	3.37 (99)	1.66 (118)	1,187 (103)
摘花房なし	1.09	0.87	0.63	0.79	3.38 (100)	1.42 (100)	1,156 (100)

^z 可販収量は総収量から規格外品と小果を除いたもの

^y 粗収入は各月の平均単価×可販収量の合計

[その他]

研究課題名：夏秋雨除けトマト栽培における秋期増収技術の開発

予算区分・研究期間：県単・平29~令3年度

研究担当者：山下尋揮

関連情報等：1) 試験研究主要成果、[令元 \(32-33\)](#)